

新刊紹介

大学院研究マニュアル

『化学』編集部編

B5変形判・255頁・定価2,266円

化学同人(1994) [Tel. 075-352-3711]

「大学院生として研究する」ためのマニュアルである。「大学院生になる」とは、人・物・知識を集約した共同体のなかで研究をはじめること。一線級の化学者は口を揃えて大学院生に注文する。「大学院生」としての自覚を持て。結末のわかった学生実験とはちがって、未解決・未解明の問題に果敢に挑戦し、これを明らかにする「研究」をせよ。この目的達成のために、研究室の人・物・知識をうまく利用するための技術、つまり「ノウハウ」を集成したのが本書というわけである。噛んで含めるように書かれているので、教授陣がもつ大学院生の理想像をくみとることは、まったく研究を体験していない学生諸氏にもやさしい。教官の指導をうけながら、少々失敗にもめげず、朝早くから夜遅くまで、実験機器を駆使して研究に没頭する大学院生のイメージがわいてくる。本書の内容がすべて理解できれば、もう立派な大学院生である。

評者自身の大学院生時代をふりかえってみると、こんな便利なマニュアルはなかった。研究室のなかにも、そんなノウハウを集めたものは見あたらなかった。ほとんどの読者、つまり、大学生・大学院生OB諸氏にとっても、もちろん執筆者にとってもおなじ思いであろう。我々はそんなノウハウを、いつ、どうやって獲得したのか、考えてみても答えはでない。「いつの間にか」だったからである。そういう意味で、研究室というのは「ぬか床」のようなものと評者は思う。入れた野菜がじんわりと「研究者」というおいしい漬物になるように、それぞれの野菜がそれぞれの持ち味を活かした漬物になるように、そして、それぞれの家、つまり研究室で独特の味の漬物ができるようにノウハウが受けつがれていく。

残念なことに本書では、一線の研究室の「ぬか床」の味まではわからない。それはこの本の意図するところではないだろうし、編まれた経緯のためかも知れな

い。有名研究室には「鬼軍曹」と呼ばれる若手の助手や博士課程の学生がいて、後輩たちをビシビシと鍛えて育てるのだと。こう言って「経験伝達型」教育の必要性を説き、やや辛口の「ぬか床」の味を感じさせるのが、本書の中では、すでに故人となられた田伏岩夫教授ひとりであったのも皮肉である。

このようなマニュアルが必要になったのは、最近のほんの数年間に研究室の人間関係の有り様が大きく変化したことを反映しているのかも知れない。腰巻きはこうアピールする。「こんな役立つ情報どこにも載ってない」「……実験をうまく進めるコツ・実験記録のつけ方・研究プランのたて方……誰も教えてくれなかったこんなノウハウ」。そう、今日では誰も教えてはくれない。目立つのがきらいな現代の院生諸氏は、むかしのように知ったかぶりをしてまで後輩に教えることはない。少々驚いたことに、何人かの教授が「ほかの公務が忙しいので、指導は助教授以下の教官にまかせてある」と言明する。教授の理想や信念をじかに感じるのもむづかしい時代である。「ぬか床」はだんだん淡泊に、そして無臭になってきた。

大学教官の多くは、いま、むかしながらの、そして自分が経験してきた「経験伝達」がうまく機能しないことを感じはじめているのではないだろうか。この本は、まるで伝言ゲームのように「伝わりにくく」なった研究室の現場を我々につきつけている。評者自身はといえば、せめて「ぬか床」が腐らないための「唐辛子」にでもなりたい、と思うばかりである。

(大谷文章)

